「人権」の二文字から学んだこと

学校法人駿台甲府学園駿台甲府中学校三年　佐野　希明

私は、小学３年生から野球をはじめました。

私と野球の出会いは、野球が好きなおじいちゃんに連れられて、スポーツ少年団の練習を見学に行ったあの日から始まりました。

その大好きな野球との出会いが、まさかイジメとの出会いになるとも知らずに。

私が入団した野球部には、六年生が五人と五年生が二人、そして同級生が四人いました。監督とコーチは、同級生のお父さん達でした。

僕の家族には、野球経験者がいないので、「野球を勉強しなさい！」と監督から言われても、何をどんな風に勉強したら良いのかさっぱり分かりませんでした。

最初の頃は、先輩のお兄さん達が教えてくれていたので救われましたが、先輩達が卒業し、私が四年生になった頃から同級生の一人から嫌がらせを受けるようになりました。

その頃、同級生五人が入部し九人の仲間が出来ましたが、私はだんだん一人でいるようになりました。

私に嫌がらせをしてくる彼は、体が大きくて声も大きく、周りのみんなも従わざるを得ないような、ジャイアンみたいな存在でした。お昼の時間は、いつも全員で輪になっておにぎりを食べるんですが、気がつくと私の座る席が足りず、離れて一人で食べることもありました。

そんな私の様子に気づいた母は泣いていましたが、私は、以外と平気でした。

何故なら、私も彼の事が好きではないと思っていたので、「あえて分かり合う必要は無いんだ」と、心の何処かで冷めていたのかもしれません。

彼との距離を保ちつつ、私は、野球に夢中になっていましたが、ある試合の日、そんな私の心が折れたと言うか、心を折られた出来事がありました。

一生懸命に野球の練習を頑張っている私の為にと、両親が、誕生日に野球のバットをプレゼントしてくれました。

念願の自分専用のバットを野球バックに入れて、試合に臨めることのあの日の嬉しさは、今でもはっきり覚えています。

仲間に自慢したい気持ちを抑え、私は、チームのバットスタンドにバットを

セットし、自分の打順を待ちました。
　僕の打順が近付いてきたので、私は、準備を始め素振りをしようとバットを探しましたが見つかりません。
「試合前に間違いなくセットしたはずなのに、何処に？どうしてないの？」胸がドキドキざわつきました。
　そして、私にいつも嫌がらせを仕掛けてくる彼の打順になりました。
なんと！私の打順より前に打席に立った彼の手には、私の新しいバットが握られていました。
　私は、その場で泣き崩れました。
　まだ試合は始まったばかりなのに。
　まだ負けてもいないのに。
　僕の心の中は、悔しさと敗北感でいっぱいになり、試合の結果は全く記憶にありません。
　今まで張り詰めていた糸が切れてしまったかのように、その日を境に、私は野球に行くのが怖くなりました。
　その頃から学校での嫌がらせも激しくなり、下校時に突き飛ばされて、車にぶつかりそうになったり、公園で自転車を壊されたりと、泣きながら帰ることも多くなりました。
　そんな私に、父と母は「人権って知ってる？あなたが生まれた時からずっと持っている人間としての大切な権利のこと。人間は誰もがかけがえのない個人として尊重され、平等にあつかわれ、自らの意思に従って自由に生きることができなければならないの。人が人として、社会の中で、自由に考え、自由に行動し､幸福に暮らせる権利を君は持っているんだよ。｣と言って力をくれました。
　そして、今後、私はどうしたいのか？どうしたら良いのか？、一緒に考える時間を作り「家族だから全力で守るよ！」と約束してくれました。
　学校の先生も協力してくれ、下校班の廃止や見守りを強化してくれました。
　数日後、野球部の仲間が私の家を訪ねて来てくれました。
「一緒に卒団まで頑張ろう！お前が抜けたら、僕たちは勝てないんだよ。」と励ましに来てくれたのでした。
　あの日、仲間と一緒に食べたラーメンの味は、本当に美味しかったです。
　一喜一憂しながらも仲間達と一緒に過ごしていたあの頃から、三年あまりが経ちました。中学三年生になった私は、今も、野球に夢中になり打ち込んでい

ます。

野球を通して学校以外でもたくさんの友達が出来ました。

この夏、中学野球を引退し、仲間とはそれぞれの道を進みますが、あの時の辛い思いを私は力に変えて全力で頑張ります。